

そうだ。

彼にフードを殺せるわけがないんだ。

そう思うと同時に、私はさらに激しい頭痛に襲われた。

「どうして一くれなかった？」

先ほど私を起こした声が、私に再度語り掛ける。

もっと、もっと思い出したくないものを私は思い出そうとしている。

がんと頭蓋の中で響くような頭痛が次第にハッキリとしていく。  
言葉が頭の中に浮かび上がる。

拝啓。

たいせつなコートへ。

いきなりこんな手紙を読ませてごめんね。

別に何か特別なことがあったわけじゃないんだ。

むしろ、特別なことが起こらないと知ってしまった……ってほうが正しいのかな？

昨日はさ、なんてことない日だったんだ。

世界はいつもと同じで灰色に染まっていて、

視界に映るのは地面とアスファルトばかりでさ、

なんで苦しいのか分からないほどに、たくさんのものが私を責めている気がしたんだ。

無責任に光る太陽の日差しがうっとうしくて。

逃げるようにに入ったコンビニでクジを何枚かもらったんだ。

なんのキャンペーンかは忘れたけどさ、

私にはそれが救いのように思えて、財布から10円玉を出して削ったんだ。

『はずれ』の文字が浮き出てくるたびに、

……騙されたような気がしてしまってさ。

その気持ちを拭おうと焦って他のクジも急いで削るんだけど、

気持ちはゆっくりと蝕まれていくばかりで、さ。

今日はとっても楽しい1日だった。

アンバーおねえちゃんとコートとシロが、私のことをこんなにも大切にしてくれてうれしかった。

だけど私はさ、気づいちゃったんだ。

私が……、こんな人間だって。

ちょっとだけでいいからさ、声を出して読み上げてみてよ。



わたし 私 はまともじゃない  
わたし 私 はずっと何かに心配している  
わたし 私 は自分の傷の治し方が分からない  
わたし 私 は空っぽだ  
あし 足のつかないプールで溺れているように感じる  
あたま 頭に石ころが詰まっているかのように重い  
し 死ぬば全てから解放されると思っている  
わたし 私 のせいで誰かが苦しんでいる  
いつも完璧を求めて失敗ばかりしている  
め まえ おお 目の前に大きな壁があるようだ  
わたし 私 ずっと顔を隠していたい  
なにひと ただ 何一つ正しいことができていない  
しっばい 失敗したことばかりを思い出してしまう  
わたし 私 は誤解されてしまっている  
わたし 私 は気が狂っている  
きずぐち 傷口をずっと綿で擦られているように感じる  
わたし 私 は無力だ  
じさつ 自殺したい  
ぜんしん 全身の毛が逆立っている  
すく 救われない気持ちがある  
わたし 私 には価値がない  
ふあん 不安だ  
じさつ 自殺したい  
わたし 私 は哀れだ  
おなかが痛い  
こころ 心から信じることができない  
くる 苦しい  
じさつ 自殺したい  
はや らく 早く楽になりたい  
こころ ずっと心が落ち着かない  
わたし 私 は疲れている  
あし 足が重い

だからさ、もう終わりにしたかったんだ。  
楽しいままで、終わりたかったんだ。

死体はコートに最初に見つけてほしかったんだ。

\*\*\*\*\*



A young woman with long brown hair in a braid, wearing a white short-sleeved shirt with a red heart, a dark pleated skirt, and red shoes, is bowing deeply. She is in a room with a desk on the left holding a small plant and a calendar on the wall behind her. The scene is dimly lit with a purple and blue color palette.

「……よわくて、ごめんね」